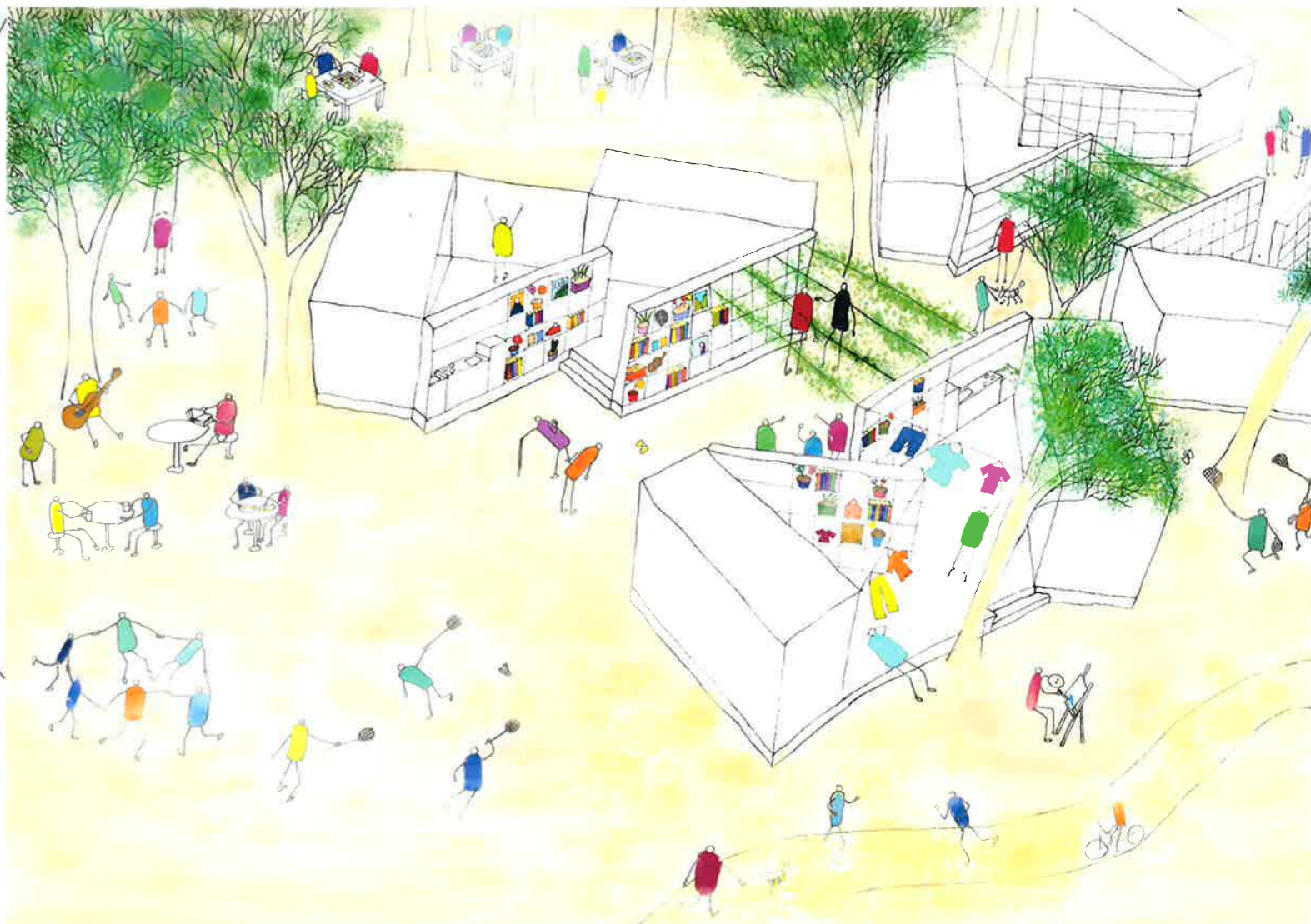


# ガレキに残る生きた記憶は、生きる力となる 仮設住宅群計画

被災者の記憶は物に残り、棚は仮設住宅のファサードになる



**仮設住宅群の敷地は、日常性のある里山が敷地として望ましい**

仮設住宅群は、被災者だけのコミュニティだけではあつてはならない。市民のなじみの場所に今までどおり足を運び、都市の日常から切り離された場所になってはいけない。



「コンテナサイズの仮設住宅兼用バンガロー」が全国の里山に配備される。日常的にはキャンプ場、バーベキュースポット、浴場、朝市などの施設を含んだ周辺住民にとってなじみのある公園である。

**step 1**

同時に、周辺の県や市で使われている「コンテナサイズの仮設住宅兼用バンガロー」が解体され、次々と運ばれてくる。

**step 2**

被災時には、第一段階として、この「コンテナサイズのバンガロー」が瞬時に仮設住宅用途に転用される。

**step 3**

そして、必要戸数のこの「コンテナサイズの仮設住宅（完成ユニット、組立キット）」が工場生産され、現地到着を待つ。到着後、仮設住宅の組み立ては、ボランティアと被災者の共同作業となり、最初のコミュニケーションが生まれる。被災者の仮設住宅群は、日常の都市生活の延長上にあるため、被災者の不安を周辺住民の日常で包み込むことによって和らげる。

